

MAKE THE
WORLD SEE

Milestone Systems

XProtect® Incident Manager 2025 R2

システム管理者マニュアル



内容

著作権、商標、および免責条項	4
概要	5
システム管理者用のXProtect Incident Manager	5
新機能	6
XProtect Incident Manager 2023 R1 の新機能	6
本書と e ラーニングコース	6
ライセンス	7
XProtect Incident Managerライセンス	7
XProtect Incident Managerのライセンスをアクティベートします。	7
要件と検討事項	8
システム要件	8
モーション検知が必要	8
XProtect Incident Managerの使用ポート	8
ログへの記録とSQL Serverデータベース	9
システムアーキテクチャ	10
クラスタリング	11
XProtect Incident ManagerおよびMilestone Federated Architecture	11
使い始めるの概要	12
インストール	13
XProtect Incident Managerのインストール	13
XProtect Incident ManagerおよびLog Serverサービス	13
設定	14
インシデントプロジェクトの保存期間の定義	14
Management Clientのインシデントプロパティ	14
インシデントプロパティの使用方法和定義方法の例	15
シナリオ	15
シナリオ：インシデントタイプを使用して人身事故の被害者を特定する	16
シナリオ：インシデントカテゴリーを使用して人身事故の発生原因と発生場所を資料化する	17
シナリオ：インシデントデータを使用して人身事故件数と追加の状況情報を文書化する	20
インシデントタイプを定義/編集する	22

インシデントステータスを定義/編集する	22
インシデントカテゴリを定義/編集する	23
インシデントデータを定義/編集する	24
レポートタイトルの定義と編集	25
XProtect Incident Managerの機能およびユーザーインターフェイス要素に対する権限を指定する	25
ユーザーインターフェイスの詳細	26
インシデントプロパティ（インシデントノード）	26
インシデントタブ（セキュリティ>役割ノード）	27
トラブルシューティング	28
XProtect Incident Managerトラブルシューティング	28
システムログファイル	28
XProtect Smart Clientのメッセージ	28
XProtect Smart ClientとXProtect Management Clientのメッセージ	29
用語集	30

著作権、商標、および免責条項

Copyright © 2025 Milestone Systems A/S

商標

XProtect は Milestone Systems A/S の登録商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の登録商標です。App Store は Apple Inc. のサービスマークです。Android は Google Inc. の商標です。

本文書に記載されているその他の商標はすべて、該当する各所有者の商標です。

免責条項

本マニュアルは一般的な情報を提供するためのものであり、その作成には細心の注意が払われています。

この情報を使用することにより発生するリスクはすべて、使用者が負うものとします。また、ここに記載されている内容はいずれも、いかなる事柄も保証するものではありません。

Milestone Systems A/S は、事前の通知なしに変更を加える権利を有するものとします。

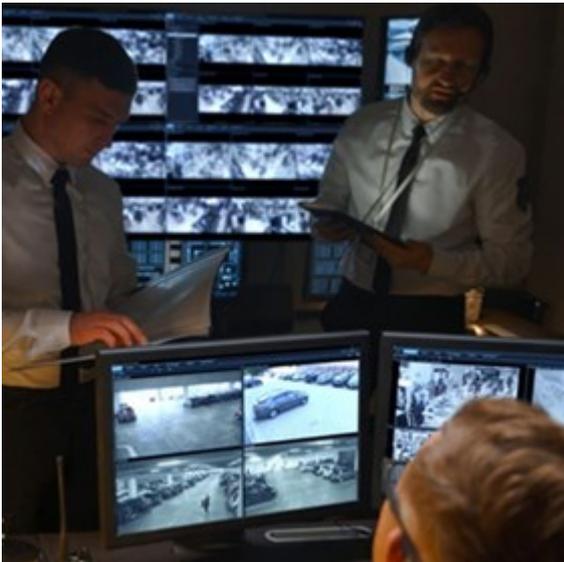
本書の例で使用されている人物および組織の名前はすべて架空のものです。実在する組織や人物に対する類似性は、それが現存しているかどうかにかかわらず、まったく偶然であり、意図的なものではありません。

この製品では、特定の規約が適用される可能性があるサードパーティー製ソフトウェアを使用することがあります。その場合、詳細はMilestoneシステムインストールフォルダーにあるファイル3rd_party_software_terms_and_conditions.txtをご参照ください。

概要

システム管理者用のXProtect Incident Manager

XProtect Incident Manager は、組織がインシデントを文書化したり、XProtect VMS からのシーケンスエビデンス（ビデオ、音声の場合もあり）と組み合わせることを可能にする拡張機能です。



XProtect Incident Managerのユーザーは、ビデオ以外にも、インシデントプロジェクトのすべてのインシデント情報を保存することができます。インシデントプロジェクトから、各インシデントのステータスとアクティビティを追跡することができます。このようにして、ユーザーはインシデントを効果的に管理し、内部的には同僚と、外部的には当局と強力なインシデントのエビデンスを簡単に共有できます。

XProtect Incident Manager は、調査対象の場所で起きているインシデントを概観および理解するのに役立ちます。この知識により、組織は同様のインシデントが今後発生する可能性を最小限に抑えるための手順を実装できます。

XProtect Management Client では、組織の XProtect VMS のシステム管理者は、XProtect Incident Manager で使用可能なインシデントプロパティを組織のニーズに合わせて定義することができます。XProtect Smart Client のオペレータはインシデントプロジェクトを開始、保存、管理し、インシデントプロジェクトにさまざまな情報を追加することができます。これには、フリーテキスト、システム管理者が定義したインシデントプロパティ、および XProtect VMSからのシーケンスが含まれます。完全なトレーサビリティを実現するために、XProtect VMSは、システム管理者がインシデントプロパティを定義および編集するとき、およびオペレータがインシデントプロジェクトを作成および更新するときにログを記録します。

新機能

XProtect Incident Manager 2023 R1 の新機能

- GDPR または個人データに関するその他の適用法を遵守するために、XProtect Management Client のシステム管理者はインシデントプロジェクトの保存期間を定義できます。

XProtect Incident Manager 2022 R3 の新機能

- 現在、XProtect Incident Manager 拡張機能は、XProtect Expert、XProtect Professional+、および XProtect Express+ のバージョン 2022 R3 以降とも互換性があります。
- XProtect Incident Manager は 10,000 件以上のインシデントプロジェクトを表示できるようになりました。

XProtect Incident Manager 2022 R2 の新機能

- この拡張機能の最初のリリース。
- XProtect Incident Manager 拡張機能は、XProtect Corporate のバージョン 2022 R2 以降、および XProtect Smart Client のバージョン 2022 R2 以降と互換性があります。

本書と e ラーニングコース

本書は、XProtect Incident Manager の機能を使って強力なエビデンスを収集する方法を説明します。

Milestone はすべての XProtect 製品に e ラーニングコースを提供しています。Milestone Learning Portal の <https://learn.milestonesys.com/index.htm> をご覧ください。

XProtect Incident Manager のコースを探すには、**incident manager** を検索してください。**Using XProtect Incident Manager** コースは XProtect Smart Client のオペレータ用で、**Configuring XProtect Incident Manager** コースは XProtect Management Client のシステム管理者用です。

ライセンス

XProtect Incident Managerライセンス

XProtect Incident Manager には、以下のライセンスが必要です。

- **基本ライセンス** - XProtect Incident Manager の機能を完全に使用するために必要

XProtect Incident Manager の使用は、以下の VMS 製品およびバージョンでのみサポートされています。

- XProtect Corporate 2022 R2 以降：XProtect Incident Manager の基本ライセンスが付属します
- XProtectExpert、XProtectProfessional+、および以降：XProtectIncidentManagerの基本ライセンスは別売りです

XProtect Incident Managerのライセンスをアクティベートします。

XProtect Corporateのバージョン2022 R2またはそれ以降をご使用の場合は、XProtect Incident Managerのライセンスが含まれ、お持ちのXProtect VMSのライセンスと共にアクティベートされます。

XProtect Incident Manager、XProtect Expert、XProtect Professional+、またはXProtect Express+バージョン以降の既存のインストールに対して2022 R3を購入した場合は、新しいライセンスをアクティベートしてください。

要件と検討事項

システム要件

XProtect Incident Manager拡張機能のシステム要件はXProtectVMSおよびXProtect Smart Clientと同じです。

さまざまな VMS アプリケーションおよびシステムコンポーネントのシステム要件についての情報は、Milestone ウェブサイト (<https://www.milestonesys.com/systemrequirements/>) をご覧ください。

モーション検知が必要

XProtect Incident Managerの機能はシーケンスの録画をトリガーしません。通常、インシデントが発生するとモーションもあります。

したがって、カメラのモーション検知を有効化して、XProtect Smart Clientのオペレータがカメラからの関連シーケンス録画をインシデントプロジェクトに追加できるようにします。

XProtect Incident Managerの使用ポート

XProtectIncidentManagerウェブサービスおよびそのサーバーコンポーネントは、着信接続に以下のポートを使用します。

ポート番号	プロトコル	プロセス	接続元	目的
80	HTTP	IIS	XProtect Smart Clientおよび Management Client	<p>80 番ポートと 443 番ポートの目的は同じです。ただし、VMS がどのポートを使用するかは、通信の安全性を確保するために証明書を使用したかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 証明書による通信のセキュリティが確保されていない場合、VMS は 80 番ポートを使用します。 証明書で通信を保護した場合、VMSは 443番ポートを使用します。
443	HTTPS	IIS		

ログへの記録とSQL Serverデータベース

SQL Serverデータベースとデータの保存

XProtect Incident Managerは、Surveillance_IMという独自のSQL Serverデータベースを持っています。Surveillance_IM SQL Serverデータベースには、インシデントプロジェクトに関するすべての情報、インシデントプロジェクトに追加されたデータ、XProtect Incident Managerに関連する一部のユーザーアクティビティのログエントリが保存されます。すべてのシーケンスは、インシデントプロジェクトに追加されたか否かにかかわらず、常にレコーディングサーバーのストレージにあるカメラのメディアデータベースに保存されます。

XProtect Incident Managerのシステムログファイル

システムエラーをトラブルシューティングするため、Management Server システムコンポーネントをインストールしたコンピュータ内のログファイルを見つけることができます。ロケーション：

C:\ProgramData\Milestone\XProtect Incident Manager\Logs。

XProtect Incident Managerのシステムログファイルが10MB以上になると、VMSはそのファイルをアーカイブのサブフォルダーにコピーしてアーカイブします。VMSは新しいログエントリを新しいシステムログファイルに書き込みます。必要なユーザー権限がある場合は、VMSがシステムログファイルをアーカイブするタイミングを変更できます。C:\Program Files\Milestone\XProtect Management Server\IIS\IncidentManager\Web.configファイル内のアーカイブのmaxsizeの値を変更します。

Management ClientおよびXProtect Smart Clientへのユーザーアクティビティの記録

XProtect Incident Managerは、SQL Serverデータベースにユーザーアクティビティの詳細な記録を保存します。

Management Clientの管理者によってインシデントプロパティが作成/有効化/編集されると、そのアクティビティはログサーバーのSQL Serverデータベース**SurveillanceLogServerV2**に記録されます。

XProtect Smart Clientのオペレータによってインシデントプロジェクトが作成/編集されると、そのアクティビティはSurveillance_IMという名称のXProtect Incident ManagerのSQL Serverデータベース、ログサーバーのSQLデータベースSurveillanceLogServerV2、または両方のSQL Serverデータベースに記録されます。

アクティビティが記録される場所は、アクティビティにより異なります。

実行者と実行場所	アクティビティ	アクティビティのログイン先	
		Surveillance_IM	SurveillanceLogServerV2
Management	すべてのインシデントプロ	いいえ	はい

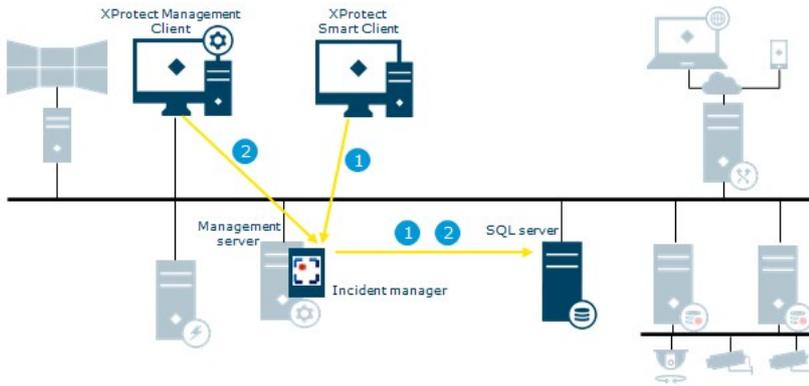
実行者と実行場所	アクティビティ	アクティビティのログイン先	
		Surveillance_IM	SurveillanceLogServerV2
Clientの管理者	パティとXProtect Incident Manager関連の設定の定義/編集/削除。		
XProtect Smart Clientのオペレータ	インシデントプロジェクトの作成/削除。インシデントレポートの生成/印刷。	はい	はい
	インシデントプロジェクトを開く/エクスポート。	はい	いいえ
	インシデントプロジェクトの編集。例えば、インシデントタイプ、ステータス、カテゴリ、データの適用あるいは変更、電話に関するコメントまたは情報の追加などです。	はい	いいえ
	シーケンスの作成/削除。インシデントプロジェクトに対するシーケンスの追加/削除。	はい	いいえ

Surveillance_IMデータベースは、Management Serverサービス向けのSQL Serverデータベースと同じSQL Serverの設備上にあります。Management Server向けのSQL Serverデータベースを移動した場合は、Surveillance_IMデータベースも同じ場所に移動する必要があります。Surveillance_IMデータベースの移動およびバックアップの方法は、他のSQL Serverデータベースと同じです。

システムアーキテクチャ

XProtect Incident Managerは、Management Serverサービスと同じコンピュータにインストールされます。

以下の図は、XProtect Incident ManagerとXProtect VMSのさまざまなコンポーネント間のシステムコミュニケーションとデータフローを説明しています。



フロー	アクションとコンポーネント
1	XProtect Smart Clientのオペレータによって、インシデントプロジェクトが開始、保存、編集、削除されます。インシデントプロジェクトとそのデータに関する情報は、拡張機能のSQL Serverデータベース Surveillance_IMに保存されます。インシデントプロジェクト関連のこれらアクティビティは、アクティビティが拡張機能のSQL ServerデータベースSurveillance_IMまたはLog ServerサービスのSQL ServerデータベースSurveillanceLogServerV2、またはその両方に記録されるかによって異なります。
2	Management Client のシステム管理者によって、インシデントプロパティが作成、編集、削除されます。インシデントプロパティの定義は、拡張機能のSQL ServerデータベースSurveillance_IMに保存されます。ユーザーのアクティビティは、Log ServerサービスのSQL Serverデータベース SurveillanceLogServerV2に記録されます。

クラスタリング

XProtect Incident Managerの設備をクラスタリングすることができます。

XProtectVMSのシステム管理者マニュアルに記載されているクラスタリングに関する情報も合わせてご参照ください。

XProtect Incident ManagerおよびMilestone Federated Architecture

XProtect Incident Managerは、親/子サイトのフェデレーテッドサイト階層の一部である設備で使用できます。

XProtect Incident Managerの基本ライセンスがあれば、すべてのサイトでXProtect Incident Managerを使用することができます。自分のサイトとその子サイトのシーケンスをインシデントプロジェクトに追加することができます。

ただし、インシデントプロジェクトは作成されたサイトでのみ利用可能です。他のサイト（親サイトまたは子サイトを問わず）で作業しているXProtectSmartClientのオペレータが、インシデントプロジェクトに対するアクセス権を持つことはありません。これは、そのサイトのシーケンスがインシデントプロジェクトに追加されていた場合でも同じです。

XProtect VMSのシステム管理者マニュアルで、Milestone Federated Architecture™に関する入手可能な情報もご参照ください。

使い始めるの概要

XProtect Incident Managerの機能を使い始めるには、以下のことを行っておく必要があります。

1. XProtect VMSをインストールし、アクティベーションを行います。
2. モーション検知を有効にする。
3. XProtect Incident ManagerでXProtect Management Clientの動作を設定する。

[Management Clientのインシデントプロパティ on page 14](#)もご参照ください。

4. 最後に、オペレータはXProtect Smart Clientにインシデントプロジェクトを保存することで、インシデントを文書化および管理したり、組織内または組織外の関連当事者と情報を共有したりできます。

インストール

XProtect Incident Managerのインストール

XProtect Corporate 2022 R2以降をインストールすると、XProtect Incident Managerもインストールされます。

XProtect Express+2022 R3以降のXProtect Incident ManagerをXProtect ExpertおよびXProtect Professional+とともに購入した場合、XProtect Incident Managerもインストールされます。

VMSのインストール方法については、VMS製品のシステム管理者向けマニュアルをご参照ください。

XProtect Incident Managerは、Management Server サービスと同じコンピュータにインストールされます。[システムアーキテクチャ on page 10](#)もご参照ください。

XProtect Incident ManagerおよびLog Serverサービス

Log Serverサービスをインストールしない場合、VMSはXProtect Incident Managerに関連するユーザーアクティビティの一部を記録できません。

初期インストール時にLog Serverサービスをインストールしなかったが、後でインストールした場合は、Incident Managerウェブサービスを再起動する必要があります。

Incident Managerウェブサービスを再起動するには、インターネット情報サービス (IIS) マネージャーを開いてください。**VideoOs IM AppPool**を右クリックして**停止**を選択し、もう一度**VideoOs IM AppPool**を右クリックして**開始**を選択します。

再起動後、VMSはログサーバーのSQL ServerデータベースSurveillanceLogServerV2にログエントリの書き込みを開始します。[ログへの記録とSQL Serverデータベース on page 9](#)もご参照ください。

設定

インシデントプロジェクトの保存期間の定義

インシデントプロジェクトにはしばしば個人データが含まれています。GDPRまたは個人データに関するその他の適用法を常に遵守するには、インシデントプロジェクトを保存する期間を定義します。またGDPRプライバシーガイドの推奨事項もご参照ください。

インシデントプロジェクトの期限が切れると、プロジェクトとそのすべての情報は自動的に削除されます。シーケンス（録画ビデオおよび音声）にはそれぞれに保存期間があります。

インシデントプロジェクトの保存期間を定義または編集する場合は、以下の手順に従います。

1. [ツール]>[オプション]を選択します。
2. [インシデント] タブに、インシデントプロジェクトを保存する日数を入力します。1~365,000日の範囲で入力できます。デフォルト値は7日です。



XProtect 2023 R1リリースの前に作成されたインシデントプロジェクトの保存期間が切れた場合でも、XProtect VMSは2023 R1より前のインシデントプロジェクトを削除しません。そうしたインシデントプロジェクトは手動で削除する必要があります。

Management Clientのインシデントプロパティ

XProtectIncidentManagerでさまざまなインシデントプロパティを使用および定義して、インシデントをXProtect SmartClientのオペレータが文書化および管理する方法を標準化すると、インシデントの概要の質を高めることができます。

次のインシデントプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	例
タイプ	インシデントタイプは、インシデント間をカテゴリー分類して区別するための第一の手段です。 インシデントタイプを定義/編集する on page 22 をご参照ください。	<ul style="list-style-type: none"> • 職場の人身事故：従業者 • 職場での傷害：請負業者 • 職場の人身事故：訪問者
ステータ	インシデントステータスでは、XProtect Smart Client	<ul style="list-style-type: none"> • 新規

プロパティ	説明	例
ス	<p>のオペレータがインシデント調査の進捗を追跡するのに役立ちます。</p> <p>インシデントステータスを定義/編集する on page 22 をご参照ください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 処理中 • 保留中 • 閉
カテゴリ	<p>インシデントカテゴリおよびインシデントデータは、XProtect Smart Clientのオペレータがインシデントプロジェクトをきめ細かくカテゴリ化するのに役立ちます。どちらのインシデントプロパティも任意です。</p> <p>インシデントカテゴリを定義/編集する on page 23 と インシデントデータを定義/編集する on page 24 をご参照ください。</p>	<p>インシデントカテゴリ：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 傷害のロケーション • 傷害の理由 <p>インシデントデータ：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 人身事故の被害者数 • 通知を受けた緊急連絡先

さまざまなインシデントプロパティの使用および定義の手順例については、[シナリオ on page 15](#)をご参照ください。

インシデントプロパティの使用方法和定義方法の例

シナリオ

システム管理者は、XProtect Incident Managerで各種インシデントプロパティを使用および定義することで、インシデントの概要を把握したり、XProtect Smart Clientのオペレータによるインシデントの資料化および管理方法の標準化をサポートしたりできます。

次のシナリオでは、職場での傷害を取り巻く状況を文書化して管理する必要があるため、以下のインシデントプロパティが必要です。

インシデントタイプ

最初にインシデントタイプを使用して、労働災害に関する主な情報を資料化します。このシナリオでは、傷害の被害者を知る必要があります。

方法は、[シナリオ：インシデントタイプを使用して人身事故の被害者を特定する on page 16](#)をご参照ください。

インシデントカテゴリー

続いて、インシデントカテゴリーを導入することで、労働災害を明確なカテゴリーに分類し、可能であれば、今後同様の事故を防止する方法を見つけます。このシナリオでは、以下もご確認ください：

- 人身事故の発生原因
- 人身事故の発生場所

方法は、[シナリオ：インシデントカテゴリーを使用して人身事故の発生原因と発生場所を資料化する on page 17](#)をご参照ください。

インシデントデータ

最後にインシデントデータを導入することで、労働災害の詳細を資料化します。このシナリオでは、以下もご確認ください：

- 人身事故の被害者数
- 非常時連絡先への通知の有無
- 商品が損傷したか、その価値はいくらか

方法は、[シナリオ：インシデントデータを使用して人身事故件数と追加の状況情報を文書化する on page 20](#)をご参照ください。

シナリオ：インシデントタイプを使用して人身事故の被害者を特定する

労働災害の追跡を開始するには、最初にその被害者のみに注目してください。インシデントタイプを使用して、この情報を資料化します。

XProtect Management Clientの[サイトのナビゲート](#)ペインから**インシデント**を選択し、**インシデントプロパティ**を選択します。**Types (タイプ)** タブを選択します。

以下のインシデントタイプを作成します。

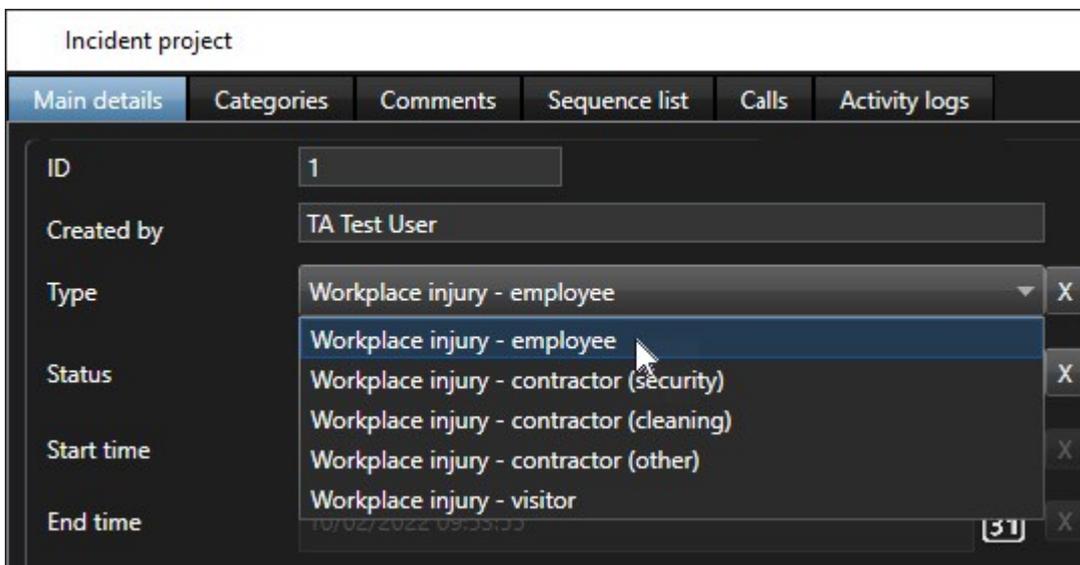
インシデントタイプの名前
職場の人身事故：従業者
職場の人身事故：請負業者（警備）
職場の人身事故：請負業者（清掃）
職場の人身事故：請負業者（その他）
職場の人身事故：訪問者

Configuration		
Types	Statuses	Categories
Category 1 Category 2 Category 3 Category 4 Category 5		
Search <input type="text"/>		
ID	Name	Description
1	Workplace injury - employee	
2	Workplace injury - contractor (security)	
3	Workplace injury - contractor (cleaning)	
4	Workplace injury - contractor (other)	
5	Workplace injury - visitor	

設定を保存して、XProtect Smart ClientのオペレータにXProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。

定義したインシデントタイプのXProtect Smart Client表示

オペレータが次回XProtect Smart Clientにログインして、インシデントプロジェクトを開始または更新する時には、これらのインシデントタイプをインシデントプロジェクトに割り当てることができます。



シナリオ：インシデントカテゴリーを使用して人身事故の発生原因と発生場所を資料化する

繰り返しの労働災害による度重なる資料化のためにXProtect Smart Clientのオペレータが作成するインシデントプロジェクト数が増えるにつれ、誰が労働災害の被害者となるかの洞察が深まります。そこで、労働災害をめぐる状況を資料化することにします。例えば以下のことが分かっていると想定します。

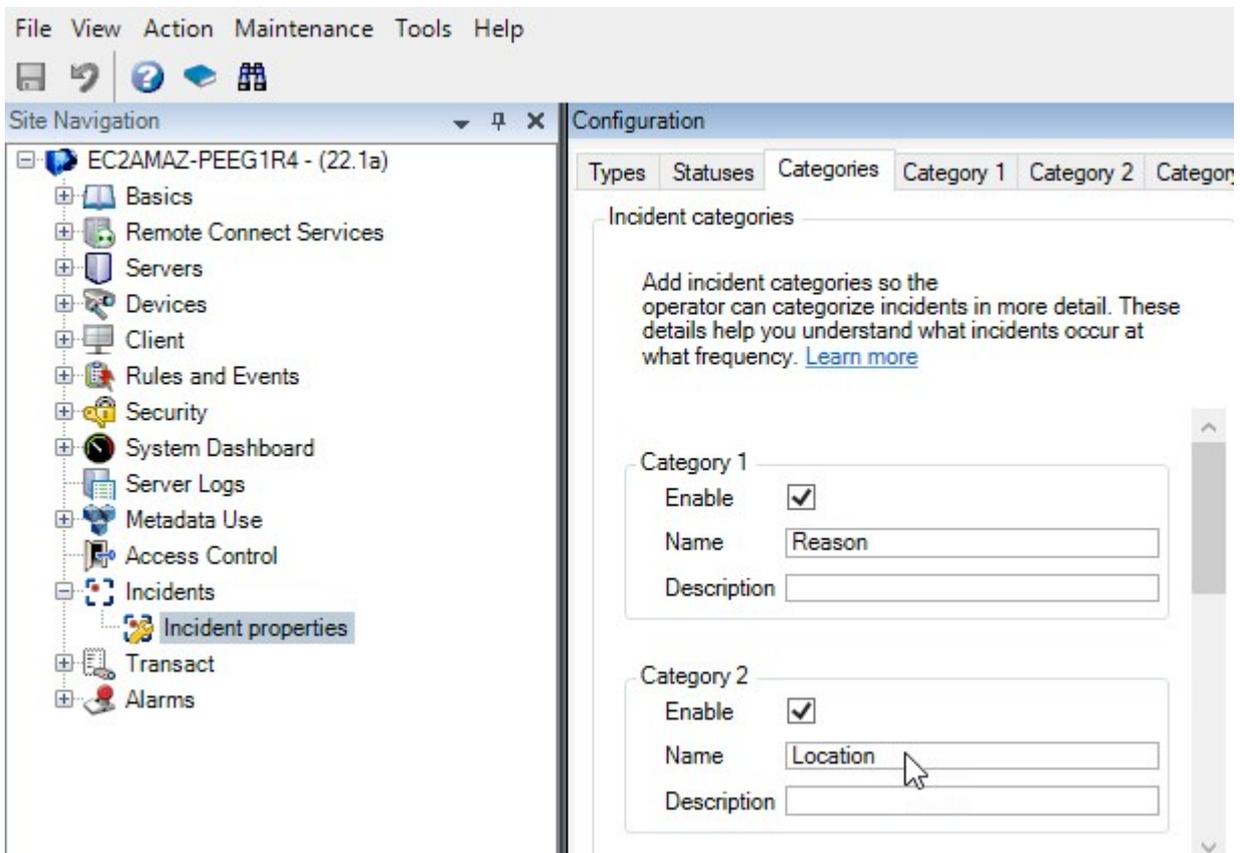
- 人身事故の大半はモノの転倒またはモノとの衝突に関係している。あらゆるインシデントプロジェクトに、その労働災害の発生原因に関する情報を記載する
- 人身事故の多くは研究所と収納室で発生しており、オフィスでの発生はわずかです。あらゆるインシデントプロジェクトに、その労働災害の発生場所に関する情報を確実に記載する

こうした詳細情報を文書化するには、インシデントカテゴリーを有効にして定義します。

XProtect Management Clientの**サイトのナビゲート**ペインから**インシデント**を選択し、**インシデントプロパティ**を選択します。[**カテゴリ**] タブを選択します。

以下のインシデントカテゴリを作成します。

カテゴリ	名前	説明
1	理由	事故の内容
2	場所	事故の発生場所



次に**カテゴリ1**タブと**カテゴリ2**タブで、労働災害でよくある発生原因と発生場所の値を作成します。

インシデントカテゴリで以下の値を作成します。

カテゴリー	カテゴリーの名前
カテゴリー1 (原因)	モノの間に挟まれる 高所からの落下 落下物にぶつかる つまずくまたは転倒する その他
カテゴリー2 (ロケーション)	研究所 収納室 駐車場 オフィス1~12 オフィス13~19 その他

Configuration

Types Statuses Categories **Category 1** Category 2 Category 3 Category 4 Category 5

Search

ID	Name	Description
11	Trapped between objects	
12	Fallen from height	
13	Struck by falling object	
14	Tripped or fallen	
15	Other	

Configuration

Types Statuses Categories Category 1 **Category 2** Category 3 Category 4 Category 5

Search

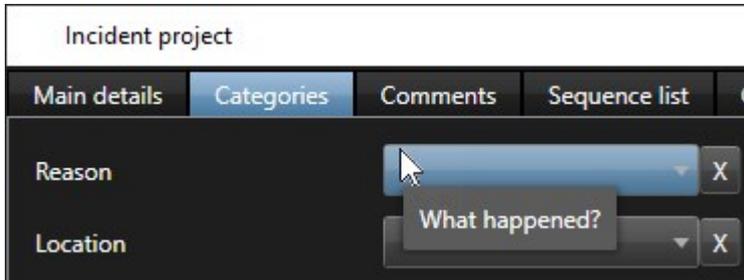
ID	Name	Description
16	Laboratory	
17	Storage room	
18	Parking lot	
19	Offices 1-12	
20	Offices 13-19	
21	Other	

設定を保存して、XProtect Smart ClientのオペレータにXProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。

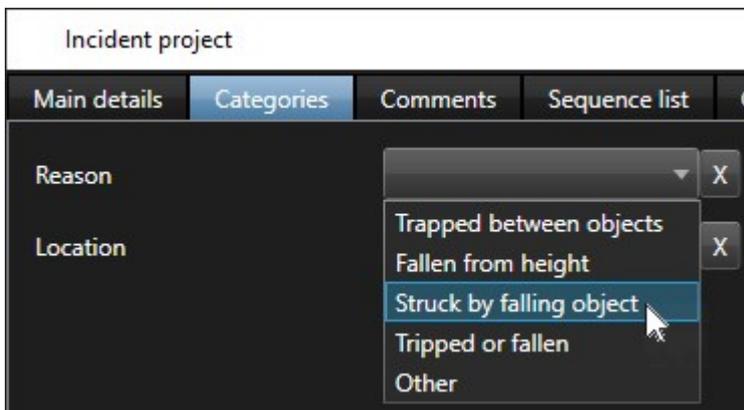
オペレータが次回XProtect Smart Clientにログインして、インシデントプロジェクトを更新する時には、これらのカテゴリーおよびカテゴリー値をインシデントプロジェクトに割り当てることができます。

定義したインシデントカテゴリとカテゴリ値のXProtect Smart Client表示

有効にして定義したインシデントカテゴリの名称と説明が、ラベルとツールチップの形式で表示されます。インシデントカテゴリを見るには、**インシデント**タブを選択して、インシデントプロジェクトをダブルクリックして開き、**カテゴリ**タブを選択します。



定義したインシデントカテゴリ値は、その値が属するカテゴリの横にリスト形式で表示されます。インシデントカテゴリ値を見るには、**インシデント**タブを選択して、インシデントプロジェクトをダブルクリックして開き、**カテゴリ**タブを選択します。



シナリオ：インシデントデータを使用して人身事故件数と追加の状況情報を文書化する

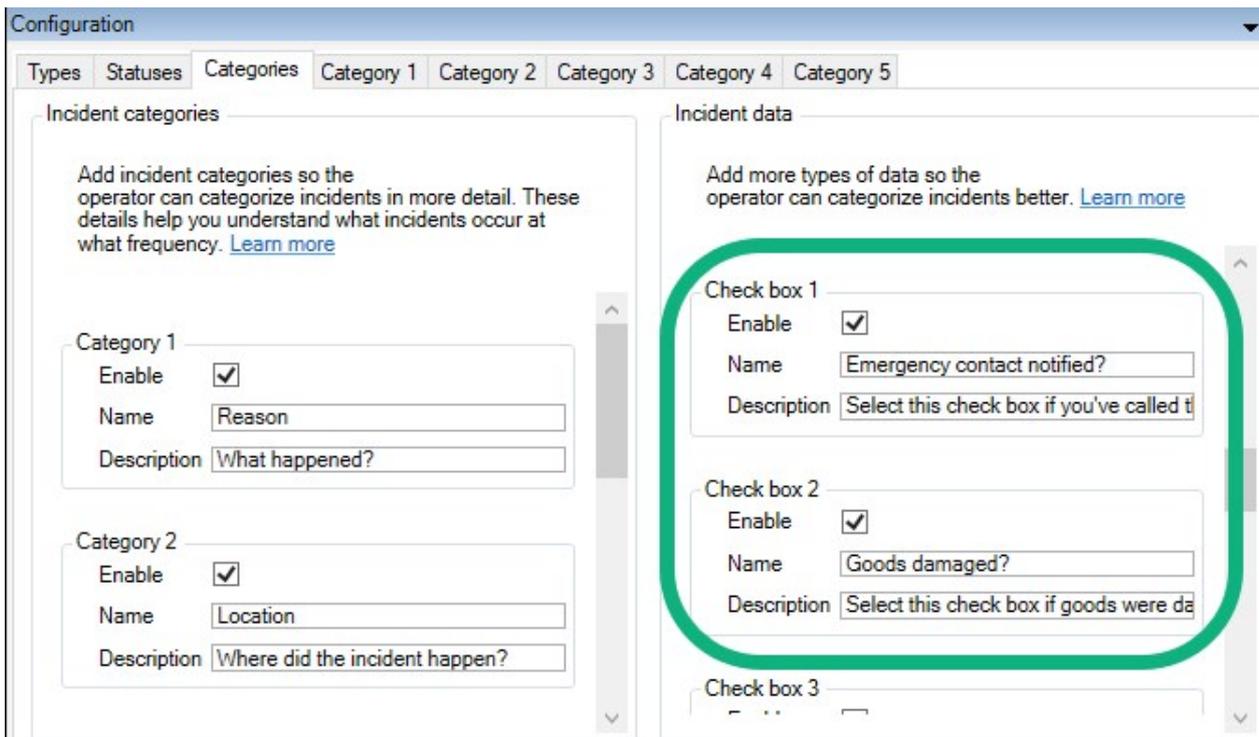
インシデントの文書化がより包括的になるにつれ、構造化された方法で各災害の追加状況を文書化する必要があることを認識します。例えば、インシデントプロジェクトごとに以下を資料化すると想定します。

- 人身事故の被害者数
- 非常時連絡先への通知の有無
- インシデントでの商品の被害の有無
- 被害があった場合のその価額

XProtect Management Clientの**サイトのナビゲート**ペインから**インシデント**を選択し、**インシデントプロパティ**を選択します。[**カテゴリ**]タブを選択します。

以下のインシデントデータを有効にして定義します。

有効にする	定義	
インシデントデータ	名前	説明
整数1	人身事故の被害者数	
チェックボックス1	非常時連絡先への通知の有無	従業員の非常時連絡先に電話した場合はこのチェックボックスを選択。
チェックボックス2	商品の被害の有無	商品に被害があった場合はこのチェックボックスを選択。
10進数1	おおよその被害価額（米ドル）	

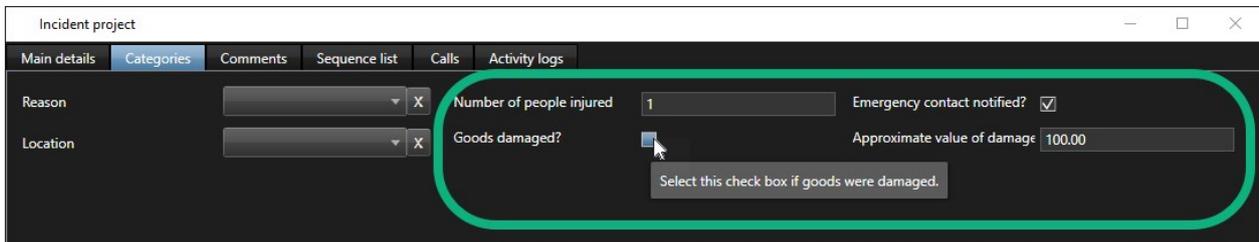


設定を保存して、XProtect Smart ClientのオペレータにXProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。

オペレータが次回XProtect Smart Clientにログインして、インシデントプロジェクトを更新すると、これらのインシデントデータ要素を使用して職場での人身事故についてより多くの情報を資料化できます。

有効にして定義したインシデントデータのXProtect Smart Client表示

有効にして定義したインシデントデータの名前と説明が、ラベルとツールチップの形式で表示されます。それらを見るには、**インシデント**タブを選択して、インシデントプロジェクトをダブルクリックして開き、**カテゴリー**タブを選択します。



インシデントタイプを定義/編集する

インシデントタイプは、インシデント間をカテゴリー分類して区別するための第一の手段です。XProtect Smart Clientのオペレータは、インシデントプロジェクトの作成または更新でプロジェクトごとに1つのインシデントタイプを割り当てることができます。

Management Clientでインシデントタイプを定義/編集する

1. **サイトのナビゲート>インシデントプロパティ**を選択します。
2. **Types (タイプ)** タブで、以下を選択できます。
 - **追加**：新しいインシデントタイプを定義する
 - **編集**：既存のインシデントタイプを更新する
 - **削除**：既存のインシデントタイプを削除する



XProtect Smart Clientで1つ以上のインシデントプロジェクトに割り当てられたインシデントタイプを編集および削除することはできません。インシデントタイプを編集/削除する場合は、事前にF5を押して表示を更新することで、インシデントプロジェクトに対する最新の変更を反映させておいてください。

3. 設定を保存して、XProtect Smart ClientのオペレータにXProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。

オペレータがXProtect Smart Clientに次回ログインすると、インシデントプロパティに対する変更が反映されます。

インシデントタイプの使用方法の例は、[シナリオ：インシデントタイプを使用して人身事故の被害者を特定する on page 16](#)をご参照ください。

インシデントステータスを定義/編集する

インシデントステータスでは、XProtect Smart Clientのオペレータがインシデント調査の進捗を追跡するのに役立ちます。XProtect Smart Clientのオペレータは、既存のインシデントプロジェクトを更新するときに、プロジェクトごとに1つのステータスを割り当てることができます。

以下はインシデントステータスの例です。

- 新規
- 処理中
- 保留中
- 閉

Management Clientでインシデントステータスを定義/編集する

1. [サイトのナビゲート] > [インシデント] > [インシデントプロパティ]を選択します。
2. **Status (ステータス)** タブで、以下を選択できます。
 - **追加**：新しいインシデントステータスを定義する
 - **編集**：既存のインシデントステータスを更新する
 - **削除**：既存のインシデントステータスを削除する



XProtect Smart Clientで1つ以上のインシデントプロジェクトに割り当てられたインシデントステータスを編集および削除することはできません。インシデントステータスを編集/削除する場合は、事前にF5を押して更新し、インシデントプロジェクトに対する最新の変更を反映させておいてください。

3. 設定を保存して、XProtect Smart ClientのオペレータにXProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。オペレータがXProtect Smart Clientに次回ログインすると、インシデントプロパティに対する変更が反映されます。

インシデントカテゴリーを定義/編集する

インシデントカテゴリーは、XProtect Smart Clientのオペレータがより詳細なデータでインシデントプロジェクトをカテゴリー別に分類するのに役立ちます。インシデントカテゴリーは任意です。インシデントプロパティを有効にすると、XProtect Smart Clientのオペレータは、割当済みのインシデントタイプやインシデントのステータス、その他インシデントプロパティに関係なく、それらをすべてのインシデントプロジェクトに割り当てることができます。

5つのインシデントカテゴリーを有効にして使用することができます。

Management Clientでインシデントカテゴリーを有効にして定義/編集する

1. [サイトのナビゲート] > [インシデント] > [インシデントプロパティ]を選択します。
2. **カテゴリ**タブを選択し、**インシデントカテゴリ**領域でカテゴリを有効にします。
3. カテゴリに名前と説明を付けます（説明は任意）。
4. 有効にしたカテゴリに対応する**カテゴリ1~5**のタブのいずれかを選択します。例えば**カテゴリ**タブで**カテゴリ2**を有効にした場合は、**カテゴリ2**のタブを選択します。

5. 右側の**カテゴリ1~5**のタブで、以下を選択できます。

- **Add (追加)** : 新しいカテゴリ値を定義する
- **Edit (編集)** : 既存のカテゴリ値を更新する
- **Delete (削除)** : 既存のカテゴリ値を削除する



XProtect Smart Clientのオペレータが1つ以上のインシデントプロジェクトに割り当てたカテゴリ値を編集および削除することはできません。カテゴリ値を編集/削除する場合は、事前にF5を押すか、**表示を更新**を選択することで、インシデントプロジェクトに対する最新の変更を反映させておいてください。

6. 設定を保存して、XProtect Smart ClientのオペレータにXProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。

オペレータがXProtect Smart Clientに次回ログインすると、インシデントプロパティに対する変更が反映されます。インシデントカテゴリの使用方法の例は、[シナリオ：インシデントカテゴリを使用して人身事故の発生原因と発生場所を資料化する on page 17](#)をご参照ください。

インシデントデータを定義/編集する

インシデントデータは、XProtect Smart Clientのオペレータがより詳細なデータでインシデントプロジェクトをカテゴリ別に分類するのに役立ちます。インシデントデータは任意です。インシデントプロパティを有効にすると、XProtect Smart Clientのオペレータは、割当済みのインシデントタイプやインシデントのステータス、その他インシデントプロパティに関係なく、それらをすべてのインシデントプロジェクトに割り当てることができます。

インシデントデータはいくつかの型に分かれます。

- 整数、10進数、フリーテキストを入力するためのフィールド
- チェックボックスおよび日付と時刻の選択

インシデントデータ型ごとに3つのデータを有効にして定義することができます。

Management Clientでインシデントデータを有効にして定義/編集する

1. **[サイトのナビゲート]** > **[インシデント]** > **[インシデントプロパティ]**を選択します。
2. **カテゴリ**タブを選択し、**インシデントデータ**で、目的に最適なインシデントデータの型を有効にします。
3. インシデントデータの型に名称と任意で説明を加えます。
4. 必要に応じて複数のインシデントデータ型を有効にして定義できます。
5. XProtect Smart Clientのオペレータに XProtect Smart Clientを再起動するよう要求します。

オペレータがXProtect Smart Clientに次回ログインすると、インシデントプロパティに対する変更が反映されます。インシデントデータの使用方法の例は、[シナリオ：インシデントデータを使用して人身事故件数と追加の状況情報を文書化する on page 20](#)をご参照ください。

レポートタイトルの定義と編集

XProtect Smart Clientのオペレータは、インシデントプロジェクトにすでに追加したすべてのテキスト情報を含むレポートを作成することができます。

副題の**インシデントレポート**とは別に、特定のメインタイトルを加えたい場合、Management Clientでそのタイトルを定義することができます。例えばメインタイトルに自分が属している組織の名称を付けることができます。

Management Clientでレポートのタイトルを定義または編集するには、以下の手順に従います。

1. [ツール]>[オプション]を選択します。
2. [インシデント]タブの、[インシデントレポートのタイトル]フィールドにレポートのタイトルを入力します。

XProtect Incident Managerの機能およびユーザーインターフェイス要素に対する権限を指定する

インシデント関連の機能およびユーザーインターフェイス要素に対する以下の権限を指定することができます。

- オペレータの役割：XProtect Smart Clientでの表示および管理を許可
- システム管理者の役割：XProtect Management Clientでの表示および定義を許可

以下の権限を付与することもできます。

- 権限なし
- 表示権限
- 管理権限

ユーザーがユーザーインターフェイス要素を表示してアクセスできるようにするには、ユーザーに表示権限を付与する必要があります。

機能の管理権限をユーザーに付与するということは、その機能に関する設定およびプロパティの表示・作成・編集・削除を許可するということです。表示権限は、その機能に関する設定およびプロパティの表示のみを許可するだけで、その作成、編集、削除は許可しません。

管理者の役割を割り当てられたユーザーには、Management ClientおよびXProtect Smart Client両方のすべてのインシデント関連機能とユーザーインターフェイスに対する権限のすべてが付与されます。

Management Clientで権限を指定する

1. **サイトのナビゲート>セキュリティ>役割**を選択します。
2. **インシデント**タブを選択し、**役割の設定**ウィンドウで**インシデント**ノードを展開します。
3. XProtect Smart Clientオペレータの役割にインシデントプロジェクトの管理または表示権限を付与する場合：
 1. オペレータの役割を選択するか、新しい役割を作成します。
 2. オペレータの役割を持つユーザーがManagement Clientで定義したインシデントプロパティを利用できるように、**インシデントプロパティ**を選択して**ビュー**の権限を付与します。
 3. インシデントプロジェクトに関係する一般的な機能およびユーザーインターフェイス要素に対するオペレータの役割権限を付与する場合は、**インシデントプロジェクト**ノードを選択して、インシデントプロジェクトの管理権限または表示専用権限のどちらをその役割に持たせるか選択します。
 4. 追加の機能とユーザーインターフェイス要素に対する権限を付与する場合は、**インシデントプロジェクト**を展開して、機能またはユーザーインターフェイス要素を選択し、権限を付与します。
4. Management Clientシステム管理者の役割に権限を付与する場合：
 1. 管理者の役割を選択するか、新しい役割を作成します。
 2. **インシデントプロパティ**を選択し、システム管理者がXProtect Smart Clientのオペレータに定義できるインシデントプロパティの管理または表示専用のどちらの権限をその役割に持たせるか選択します。



XProtect Smart Clientのオペレータに、インシデントプロジェクトに追加されたシーケンスをエクスポートする権限を付与する場合は、Smart Clientプロファイルで定義します。

XProtect Incident Manager関係の権限の設定についての詳細は、[インシデントタブ \(セキュリティ>役割ノード\)](#) on page 27をご参照ください。

ユーザーインターフェイスの詳細

インシデントプロパティ (インシデントノード)

次の情報は、XProtect Incident Managerに関連する設定の説明です。

XProtect Smart Clientのオペレータに対するインシデントプロパティはすべて、これらのタブで定義します。

- タイプ
- ステータス
- カテゴリー
- カテゴリー1~5

すべてのインシデントプロパティには、以下の設定があります。

名前	説明
名前	インシデントプロパティの名称が一意である必要はありませんが、一意で分かりやすい名称にした方が、多くのメリットがあります。
説明	定義するインシデントプロパティの追加説明。例えば <i>Location</i> (ロケーション) という名称のカテゴリを作成した場合は、 <i>Where did the incident happen?</i> (インシデントの発生場所) などの説明を付けることができます。

インシデントタブ (セキュリティ>役割ノード)

XProtect Incident Manager がある場合は、役割に以下の権限を指定できます。

Management Client管理者の役割にインシデントプロパティの管理または表示権限を付与するには、**Incident properties (インシデントプロパティ)** ノードを選択します。

定義したインシデントプロパティを表示するXProtect Smart Client権限をオペレータに付与するには、**インシデントプロパティ**を選択して**ビュー**権限を付与します。インシデントプロジェクトを管理または表示するための一般的な権限を付与するには、**インシデントプロジェクト**ノードを選択します。**インシデントプロジェクト**ノードを選択し、サブノードを選択することで、追加の機能または能力を使用する権限を付与します。

名前	説明
管理	機能に関連する設定およびプロパティを管理 (表示、作成、編集、削除)、または Management Client か XProtect Smart Client のいずれかで選択されているノードによって表されるユーザーインターフェイス要素を表示する権限。
ビュー	インシデントプロパティで定義された機能、ビューに関連する設定とプロパティを表示 (作成、編集および削除ではない)、または Management Client か XProtect Smart Client のいずれかで選択されているノードによって表されるユーザーインターフェイス要素を表示する権限。

トラブルシューティング

XProtect Incident Manager トラブルシューティング

システムログファイル

システムエラーをトラブルシューティングするため、Management Server システムコンポーネントをインストールしたコンピュータ内のログファイルを見つけることができます。ロケーション：

C:\ProgramData\Milestone\XProtect Incident Manager\Logs。

XProtect Smart Clientのメッセージ

シーケンスを追加できません。後でもう一度お試しください。

VMS サーバーとの接続が不安定です。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者：ネットワークおよびすべてのVMSサーバー、サービスが稼動しているかどうか確認してください。

インシデントプロジェクトを作成できません。後でもう一度お試しください。

VMS サーバーとの接続が不安定です。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者：ネットワークおよびすべてのVMSサーバー、サービスが稼動しているかどうか確認してください。

レポートを生成できません。後でもう一度お試しください。

このメッセージでは2つの原因が考えられます。

- a. VMS サーバーとの接続が不安定です。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者：ネットワークおよびすべてのVMSサーバー、サービスが稼動しているかどうか確認してください。

- b. インシデントプロジェクトリストとシーケンスリストがリアルタイムに更新されていない。このため、XProtect Smart Clientのオペレータがこれらのリストのいずれかを開いていたときに、別のオペレータによってそのリストから項目が削除された場合、その削除されたリスト項目、またはそのリスト項目に含まれる要素を編集しようとする、このメッセージが表示されます。

例えばオペレータがインシデントプロジェクトのリストを開いているときに、別のオペレータがインシデントプロジェクトを削除したと仮定します。その場合、コンピュータ上のリストには削除されたインシデントプロジェクトが表示されますが、レポートを生成しようとするこのエラーメッセージが返されます。

このアクションは実行できません。リストを更新してください。

インシデントプロジェクトリストとシーケンスリストがリアルタイムに更新されていない。このため、XProtect Smart Clientのオペレータがこれらのリストのいずれかを開いていたときに、別のオペレータによってそのリストから項目が削除された場合、その削除されたリスト項目を編集または保存しようとする、このメッセージが表示されます。

このアクションは実行できません。後でもう一度お試しください。

VMS サーバーとの接続が不安定です。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者：ネットワークおよびすべてのVMSサーバー、サービスが稼動しているかどうか確認してください。

すべてのシーケンスを削除することはできません。後でもう一度お試しください。

VMS サーバーとの接続が不安定です。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者：ネットワークおよびすべてのVMSサーバー、サービスが稼動しているかどうか確認してください。

[x]を保存できません。後でもう一度お試しください。

このメッセージはコメント、電話に関する情報、または別の設定の保存を試みたときに表示されます。このメッセージでは2つの原因が考えられます。

- a. VMS サーバーとの接続が不安定です。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者：ネットワークおよびすべてのVMSサーバー、サービスが稼動しているかどうか確認してください。

- b. インシデントプロジェクトリストとシーケンスリストがリアルタイムに更新されていない。このため、XProtect Smart Clientのオペレータがこれらのリストのいずれかを開いていたときに、別のオペレータによってそのリストから項目が削除された場合、その削除されたリスト項目、またはそのリスト項目に含まれる要素を編集しようとする、このメッセージが表示されます。

例えばオペレータがインシデントプロジェクトのリストを開いているときに、別のオペレータがインシデントプロジェクトを削除したと仮定します。この後、削除されたインシデントプロジェクトをコンピュータから開くことはできますが、コメントや電話に関する情報の編集、インシデントステータスの変更、またはその他の操作を試みると、このエラーメッセージが返されます。

権限が拒否されました。

システム管理者が機能を使用する権限を付与していません。この機能なしでタスクを完了できない場合は、システム管理者に連絡してください。

レポートが生成されましたが、含まれていない情報があります。

レポートの生成中にVMSサーバーまたはサービスとの接続が失われました。レポートにインシデントプロジェクトの一部情報が含まれていません。レポートを生成し直してみてください。

[XProtect Smart ClientとXProtect Management Clientのメッセージ](#)

この情報は利用できません。

システム管理者が機能を使用する権限を付与していません。この機能なしでタスクを完了できない場合は、システム管理者に連絡してください。

用語集

X

XProtect Incident Manager

XProtect 監視システムのアドオンとして使用できる製品。XProtect Incident Manager では、XProtect Smart Client 以内にインシデントを文書化して管理できます。

あ

アクティビティログ

VMS で追加された、VMS でのユーザーのアクティビティを説明するログエントリ。

い

インシデント

組織のスタッフ、資産、運用、サービス、または機能の損傷、損失、混乱につながる可能性のある有害または危険な行為または状況。

インシデントカテゴリ

インシデントに関するオプションの詳細。カテゴリでインシデントに関するより詳細な情報を追加できます。インシデントカテゴリの例としては、インシデントの発生場所、共犯者の人数、および当局の関与有無などがあります。

インシデントタイプ

インシデントに関する詳細情報。タイプにより、それがどのようなインシデントであるかを分類します。以下はインシデントタイプの例です。盗難、自動車事故、不法侵入。

インシデントのステータス

インシデントに関する詳細情報。インシデントステータスでインシデント調査の進捗を追跡できます。以下はインシデントステータスの例です。新規、処理中、保留中、処理済

インシデントのプロパティ

インシデントプロジェクトに対してカテゴリ、ステータス、タイプなど幅広いデータが定義できます

インシデントプロジェクト

インシデントに関するデータが保存されているプロジェクト。データには、ビデオ、音声、コメント、インシデントカテゴリ、およびその他のデータが含まれます。オペレータは、コメントを追加し、XProtect Smart Client のインシデントプロジェクトに関連するインシデント特性を選択します。Management Client では、システム管理者は、インシデントプロジェクトを作成するときに、オペレータが使用できるインシデント特性を定義します。

インシデント管理

ネガティブな影響を伴う状況を迅速に是正して今後の再発を防ぐために、インシデントを識別、文書化、処理、および分析する組織のアクティビティ。インシデントも参照してください。

し

シーケンスリスト

XProtect VMS から開始された、ビデオあるいは音声の連続した時間の録画／録音のリスト。

と

ドラフトシーケンスリスト

ビデオあるいは音声の連続した時間の録画／録音の一時的なリスト。ユーザーは、1) 新規インシデントプロジェクトを作成し、新規プロジェクトにシーケンスを追加するか、2) 既存のインシデントプロジェクトにシーケンスを追加する最初のステップとして、ドラフトシーケンスリストにさまざまなシーケンスを追加できます。



helpfeedback@milestone.dk

Milestone について

Milestone Systems はオープンプラットフォームのビデオ管理ソフトウェア (VMS) の世界有数のプロバイダーです。お客様の安全の確保、資産の保護を通してビジネス効率の向上に役立つテクノロジーを提供しています。Milestone Systems は、世界の 15 万以上のサイトで実証された高い信頼性と拡張性を持つソリューションにより、ネットワークビデオ技術の開発と利用におけるコラボレーションとイノベーションを促進するオープンプラットフォームコミュニティを形成しています。Milestone Systems は、1998 年創業、Canon Group 傘下の独立企業です。詳しくは、<https://www.milestonesys.com/>をご覧ください。

